

第 22 回(2009. 8.28 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「9 月は中秋の名月」

この時期は、秋の気配がそこまでやってきた気配がして、食欲も進み、「天高く馬肥ゆる秋」といわれるように食べ物がおいしい。最近ではメタボが心配だといいいながら、つい食べ過ぎて、馬だけではなく人間も肥ゆる季節になる。「天高く」とは、この季節は空気が澄んでくるから、紺碧の空が非常に美しく、どこまでも続いているように感じることを表現しているのだろうといわれている。わが国では、古来より旧暦の 8 月 15 日の夜は「月見」をする風習がある。

「月見の行事」は、中国で月を愛でる「望月」という行事があったが、それが日本に伝えられたものといわれている。しかし、もともと日本にも農業の節目であったこの時期に、豊作を祈願する祭があったに違はなく、それが中国の行事と一緒にススキや団子を供えた今日の月見になったものだろうが、この風習は平安時代からあったようである。

庶民の間でも月見が盛んになった江戸時代では、「中秋の名月」には「秋の七草」を飾り、団子をお供えするが、団子の他に里芋などを飾ったことから、「芋名月」とも言うようになった。団子の数も 12 個で閏月は 13 個と決まっていたようだが、「十五夜」だから 15 個だという説もある。

なお、「秋の七草」は「秋の野に咲きたる花を指折り数えれば七草の花。萩の花、尾花、葛花、撫子の花、女郎花、また藤袴、朝貌の花」という『万葉集』にある山上憶良の詩から来たのではないといわれている。「1 月は初夢と七草」でも触れたが、秋の七草は「春の七草」のような食べるものではなく眺めるものである。春の七草は、古代中国では「七種菜羹」といって、七種類の野菜が入ったスープのような料理を食べて無病息災を祈る習慣があり、これが日本に入ってきたものだという。春の七草の蕪や大根などと同様に、秋の七草の萩などは草と呼ぶのは変だから、本来は七種と書いてナナクサと読むのだろう。秋の七草のなかで、尾花は「幽霊の正体見たり枯れ尾花」という文句で知られているように、ススキのことだし、朝貌とは、現在ある朝顔とは違ってキキョウだろうといわれている。

江戸時代では、月見は旧暦 8 月 15 日の夜の月と、旧暦の 9 月 13 日の 2 回行われた。9 月 13 日の月は「十三夜」と呼び、栗や枝豆を供えて月見をしたから、この月を「栗名月」とか「豆名月」あるいは「名残の月」などと呼んでいた。どちらか片方しか月見をしなければ、「片見月」と呼んで縁起が悪いとされていたようである。

「中秋の名月」という言葉の「中秋」を「仲秋」と書く場合もあるが、正確には別の意味である。「仲秋」は 8 月をいう。旧暦では 7、8、9 月を秋といったが、7 月を孟秋(秋の始めという意味)、8 月は仲秋、9 月を季秋(季は末に通じるから秋の終わりという意味)と呼んでいた。「中秋」とは仲秋の真ん中をいう。8 月を秋と呼ぶには若干抵抗があるが、旧暦では 7、8、9 月が秋で、現在の暦に直せば 8 月の半ばから 11 月上旬頃になる。

この名月にまつわる話は、昔からたくさんあるが、「田毎の月」といって、棚田(段々畑)に水が張られると、小さな池が無数に出来て、それぞれに月が映っている光景は圧巻である。「棚田百年」という言葉がある。棚田を造成しても、田圃の漏水や畔道の強度、水利の具合など棚田が落ち着くまで百年かかるという諺である。わが国では過疎化が進み、各地で棚田が消えているが、ふたたび水稻栽培を始めようとしても、もうできない。中国では、かなりの規模の棚田が現在でもつかわれているが、日本ではもうじき姿を消すだろう。そのうちに「世界遺産に登録しよう」などといひ出す者も出てくるに違いない。

棚田といえば、姨捨山伝説のある信州冠着山(かむりきやま)周辺の「田毎の月」は有名で、信州の俳人小林一茶は「信濃では月と仏とおらが蕎麦」という有名な句をのこしている。この句に登場する「蕎麦」は更科蕎麦(雲竹斎の生地長野県更級郡からきている)、「仏」は善光寺の阿弥陀如来、そして「月」は冠着山の「田毎の月」を詠んだ句だといわれている。

ちなみに、善光寺の本尊は「一光三尊阿弥陀如来」といわれ、インドから朝鮮半島百濟経由で欽明天皇 13 年(552)にわが国に伝えられた日本最古の仏像だといわれているが、秘仏だから一般の人は拝観できない。本尊を模して造られた三尊像は「前立本尊」とよばれ、7 年に一度「御開帳」と称して拝観することができる。今年もその年に当たり、春には多くの参詣客が詰めかけ、本場の更科蕎麦を食べた。

ところで、「かけ蕎麦」は、汁をかけて食べる「汁かけ蕎麦」のことで、「盛り蕎麦」は、蕎麦を汁につけて食べるため、器(お皿や蒸籠)に盛った蕎麦である。昔は、「汁かけ蕎麦」が一般的だった。それが江戸時代中期には、盛り蕎麦の器が竹の筥にしたため、「ざる蕎麦」と呼ばれるようになった。刻み海苔を乗せて、「ざる蕎麦」と「盛り蕎麦」とを区別したのは、明治以降の話である。

蕎麦の原産地は、アムール川上流域、中国東北部あるいは中国南西部の雲南省などの説がある。黄河流域からは、数千年前の蕎麦の栽培跡も発見されているが、日本では縄文時代以前に大陸から渡ってきた北方系民族が、信州・信濃の山中で種を蒔いたのではないかと考えられている。蕎麦は、地味が悪いところや寒冷地でも栽培することが出来るが、日本の蕎麦の生産地は、北海道、茨城県、長野県などである。蕎麦の実を粗く挽くと黒っぽい粉になるが、これを更に良く挽くと白い粉になる。この真っ白な粉を使ったのが有名な「更科蕎麦」である。

更科の語源は、雲竹斎先生の郷里である信州の更級郡(さらしなぐん、現在は町村合併が進み、更級郡は消滅した)の蕎麦粉から来ているといわれている。奈良時代にはすでに更級地方から朝廷に献上されていたという。雲竹斎が生まれた長野市篠ノ井は、昔は更級郡篠ノ井町といった。雲竹斎が好んで食べる蕎麦は、篠ノ井で同級生の酒井正巳君が造っている「信濃路の味散歩・信州そば」である。この蕎麦は繫ぎに特産のとろろ芋(長芋)を使っていて実に美味しい。そこで、店の前に「更科蕎麦発祥の地」と書いた石碑を建てろ。根拠がなくとも長い年月がたてばそれが史実となるものだ。だいたい世の中とはそんなものだから先にやったほうが勝ちだ、と唆すのだが、まじめな酒井はのってこない。

なお、「二八蕎麦」という言葉をよく聞くが、蕎麦粉が 8 割で繫ぎの小麦粉が 2 割だからだと知ったかぶったことをいう者がいる。しかし、蕎麦はすべて小麦粉が 2 割と限ったものではない。1 割や 3 割の場合もあるのだが、一九蕎麦とか三七蕎麦という言葉は聞かない。二八蕎麦とは、江戸時代の屋台での蕎麦の値段が一杯 16 文だったことから、28 が 16 という洒落から来ているのだ。

また、一茶の「あの月を取ってくれろと泣く子かな」という句も有名である。中秋の夜、子供が庭に出て竹竿を振り回しているのを父親が見て、何をしているのか聞いたところ、その子供は月を取るのだという。そこで、父親は子供に諭す。「バカだなあ、屋根に登らなければ届かない」

お後がよろしいようで